

# I-3 明治期の医療器械商——大阪の 白井松之助について

ヴォルフガング<sup>1)</sup> ミヒエル

遠藤次郎<sup>2)</sup>・中村輝子

<sup>1)</sup>九州大学大学院言語文化研究院

<sup>2)</sup>東京理科大学薬学部

天保年間に見られる外科道具の引札の台頭は蘭方医療に対する関心の高まりを裏付けているが、当時はまだ輸入される高価な品々の種類もその量も極めて限られていた。明治元年の政府による官立の医学校開設、西洋医学の本格的な導入を進める政策を受け、医療道具業界にも新風が吹き込んだ。良質の商品を大量に供給する必要性が生じ、海外からの輸入路を開拓するとともに、国内の製造業及び販売業は再編を迫られた。初期からその挑戦を積極的に受け止めた人物の中ではとりわけ島津源蔵、松本伊兵衛及び白井松之助が注目に値する。本発表は白井松之助に焦点を絞り、当時の

輸入及び国産化の課題に取り組んだ起業家の事例として追究することにする。

享保元年以来薬種業を営む大阪の白井家の一二代松之助が地元の病院からヒントを得て新しい分野に乗り出し医療器械商を創業したのは、明治五（一八七二）年だった。最初は少量の転売だったと思われるが、創業六年目、府立病院長高橋正純及びオランダ人医師エルメレンス（G. J. Emerins、一八四一—一八八〇）の紹介で欧米各社との特約により医療器械の輸入を始めた。政府がドイツ医学を採用したためか、特にドイツの H・ウインドレル（Hermann Windler、一八三一—九三）がベルリンで設立した新興企業ウインドレル社との関係が密接だった。

松之助はすでに一八七〇年代後半に、刀剣師、鉄砲鍛冶、甲冑鍛冶、銅工、木工、馬具師などのものづくり職人の技術力を生かし、国産化を進めるようになってきた。その試みは一時的に苦境に陥ったものの次第に順境に向い、熟練した労働力として実った。鉄鋼部、木工部、硝子部、化学用硝子部、衡器部、量器部や営業

場の当時の写真から江戸時代の面影も感じ取れるが、明治一四年に第二回内国勸業博覧会に出した製品で松之助は三等有功賞牌を賜わった。京都(鳥津源蔵)や東京(松本伊兵衛)も活発な動きを見せる中で、同年、大阪の山口庄兵衛、白井松之助、新野辺弁造、中井安之助、大井卜新、大満筆吉、立身幸七、福井弥助、井内徳兵衛、手島政七、白井直七、中村峯次、中村順造、今西兼太郎の計一四名が医科器械商組合を設立し、一定の安定化をはかった。

大阪府病院及び地元の医師との協力関係も医科器械業の発展を支えた。明治一五年に府の医会が成立してから月例会に毎回自製品を出し批評を求めた。コレラが関西で流行した明治一二年、大阪司薬場教師ドワルス(B. W. Dwards)が提案した漏水器の製造販売を初めとし、一五年に大阪府病院薬局長が考案した「重湯煎煎剤器」及び「越幾斯保温器」を兼有する蒸留器の製作、翌年に岡山県立病院副院長と九州地方の各病院の視察等々、医療と器械製造及び販売の相互依存を物語っている。明治一九年に多大な費用を投じて発行し

た『医療器械図譜』は東京のいわしや松本器械店の目録(明治一一年刊)に続いて日本で二番目の医科器械目録であり、当時の医界に最新の情報を提供する重要な資料でもあった(第二版二二年、第三版二九年)。

各種博覧会への出品も継続されていた。明治一四年から四二年にかけて参加した博覧会において計三六の賞を受賞している。その中には二四年にシカゴで開催された万国博覧会での受賞もある。

国内外の情報を旺盛に吸収する松之助は決して受け身にはならなかった。明治二五年、彼は中華民国に医療器械を輸出し、その後ロシア、南洋などにもその販路を広げた。創業のちようど二〇年目にあたる同年のこの動きは、明治初期の起業家の柔軟性や行動力とともに、江戸時代のものづくりの技を引きついで職人たちの技術力を代表しているものと思われる。

## I-4 北條家 (佐渡市) の薬箱の検討

遠藤次郎<sup>1)</sup>・中村輝子<sup>1)</sup>  
 ヴォルフガング ミヒエル<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>東京理科大学薬学部

<sup>2)</sup>九州大学大学院言語文化研究院

新潟県佐渡市金井町の北條家は医家として一七世紀後半から一九世紀半ばまで続き、昭和五二年、同家の建物は国の重要文化財(建造物)に指定された。この北條家の総合調査が平成一〇年に行われ、蒲原宏先生が医学・医療関連資料の調査を担当された(「金井町文化財調査報告」金井町教育委員会)。これらの調査結果を参考にしながら、本研究では北條家に伝わる薬箱の中に残る薬物を中心に検討し、北條家に伝わる医学資料、ならびに、演者らが調査してきた江戸・明治時代初期の薬箱と比較・考察した。

北條家の薬箱は木製、漆塗り、五段の引き出しからなり、横二〇、奥行き三〇、高さ二五センチメートル、

製作年代と使用者は不明である。一段目には四五袋、二段目には四一袋、三段目・四段目には各二五袋、計一三六の薬袋中に生薬が現存し、五段目には薬包紙や薬袋中に二七種類の生薬末や製剤が残っている。これらの内、製剤一三種類、重複する八種類、不明四種類を除く、一三五種類の生薬について検討し、次の特徴を明らかにした。

(1) 三段目・四段目の薬袋は一段目・二段目の薬袋よりも大きい(前者は横二八×縦八八×高さ二六、後者は二五×五八×二三ミリメートル)。また、生薬名が重複する薬袋が四段目に四つ(柴胡、茯苓、半夏、桂皮)、三段目に一つ(蒼朮)ある。これらのことから、下段(三段目・四段目)のものは使用頻度の高い生薬であることが示唆された。一般に、引き出し形の薬箱では下段に使用頻度の高い生薬を置いている。北條家の薬箱もこれに該当している。

(2) 曲直瀬道三の系統を引く『衆方規矩』収載の生薬(『医療衆方規矩大成』一字画引)と比較すると、北條家の薬箱の生薬の八五%(一一五種類)が『衆方規